慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中國語に於ける品詞分類の標記について：漢語詞類論争の問題點
Sub Title	Classifications of the parts of speech in Chinese
Author	川本, 邦衛(Kawamoto, Kunie)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1956
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.6, (1956. 12) ,p.81- 101
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00060001-0081

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中國語に於ける品詞分類の標記について

——〝汉語詞类論爭〟の問題點——

川本邦衛

一

中國では解放後の社會的な種々の建設に伴つて中國語の語法に關する研究が、言語教育、言語政策への強い一般的な關心と相俟つて活潑に推進されて來た。現在語法及語彙の研究は更に盛んであり、それは中國語研究に大きな轉機をもたらしている樣に思われる。

國語に對する研究が、その一環として、五四以來の文化革命の全體に占めて來た比重は決して小さいとは言えないが、もともと中國における國語研究は長い歴史をもつにも拘らず語法の研究が極度におくれていたことは否まれない。〝馬氏文通〟によつてこれが打破されたとはいえ、それは印歐語文法の色濃い影響のもとに書かれ、以後の中國語法研究は、大よそこの〝文通〟を目標としてその體系を何とか中國語の特質を中心としたものにしようということに努力を傾けて來た。然し當初、それらは本質的な中國語の世界を展開するというよりは、〝馬氏文通〟にみられる幾多の缺陷の修正を目的とし、その限りでは年を逐うて成果をあげていたとは言えるが、馬氏と等しく常に英文法の構造をその範としていた。そして一九二四年刊行の黎錦熙の〝國語文法〟はそういった仕事の一應の完成であると見られている。その後、劉半農が〝中國文法通論〟や〝中國文法講話〟を著わしたが、これもH・スウキートの方法を奪胎したものであり、馬建忠の理論の修正以上に出るものではなかつた。楊樹達の〝高等國文法〟についても同樣なことが言える。この時代の人々は〝助

字辯略〃式の言語への關心を改めて、合理的な語法體系を創造しようと試みたのであるが、結果的にはそれがラテン文法乃至英文法の既成的外殼のうちに中國語をあてはめる方向に向けられてしまつたと思われている。然しこの後、これらの反省から生れた貴重な仕事も決して少なしとしない。一九四〇年に刊行された〃中國文法革新討論集〃はその前二年間程の右の反省を中心とする論爭から生れたものである。それは從來の實用英文法を模倣した規範文法を脱して、新しい體系への創造意欲が實際に具體化されたものと見てよいであろう。一九三六年に出た王力の〃中國文法學初探〃以後の一連の著作、呂叔湘の〃中國文法要略〃王力の〃現代中國語法〃や、同じ著者による〃中國語法理論〃或は高名凱の〃汉語語法理論〃等は、それらの試みの結實と言い得るものである。これらの著作に共通する性格は外國語の語法範疇を基として中國語の規範文法を編み出すことを避け、一般言語學の理論に基づいた方法論をもつて記述文法的な體系を完成しようとしていることである。呂叔湘はO・イエスペルセン、王力は主としてイエスペルセンとL・ブルームフイールド、高名凱はJ・ヴアンドリエスやH・マスペロなどの思想をその理論にとり入れようとしていることが明らかに見られる。

然し解放後は既に一般情勢が大きく變つた。あらゆるものが社會主義統一國家建設という目的に沿つて歩み出せば、少なくとも言語の面で國語統一はその大きな課題であるから、語法研究に對する一般的な關心も又豫想外に強いことが窺われる。勿論これは中國語の特質と、廣大な大陸に種々の方言が使用されている情況と無關係ではない。一般のこうした關心に對して、國語研究者たちの世界も自然活潑な動きを見せることになつたのは當然の趨勢であろう。解放後直ちに文字改革協會が生れたのは、蓋しこの様な空氣を反映しているものである。更に一九五一年に國語純化運動が叫ばれ、翌年中國文字改革研究委員會が設立され、これは中國科學院歴史語言研究所と提携して專門雜誌〃中國語文〃を發行して現在に至つている。その他、啓蒙的な雜誌として〃語文學習〃や〃語文知識〃等が刊行されているのは衆知の通りである。

さて解放前の國語研究が印歐語規範文法の模倣期から脱皮して、一般言語理論に基づいて漸次中國語獨自の體系形成に向つていたことは前記の通りであるが、解放後は解放前の研究對象が多く書きことばであつたのに對して、はなしことばに對する直接的記述、民族共通語を生み出すための正確な表現法の確立が研究の對象となり、國語改革と語法研究が並行して活潑に行われるようになつたのも右

のような一般情勢を裏書きするものである。こういう環境の下で國語の研究、討論、論爭は解放後はかなり派手に而も積極的に行われて來た。例えば拉丁化新文字による中國語音標化の問題、漢字の簡化卽ち簡體文字制定の問題、更にこれら言語政策と離れた學問的な多くの語法上の問題が具體的、個別的な研究にあらわれている。

中山大學語言學系、語法教研組が一九五三年十月に〝中國語文〟に發表した〈汉語語法學的主要任務——發現並掌握汉語的結構規律〉はテクニカル・タームの統一や用語法、造句法、品詞分類などの基本的な問題の研究討論を提唱し、羅常培はこれに答えて翌年一月〈語文工作者怎樣爲國家在過渡期的總路綫服務〉を同誌に發表し、五カ年計畫に沿つて言語學者の果すべき任務なるものを四カ條にまとめて示し、文字改革と竝んで語法研究を最も基本的なものからやりなおす必要があることを說いた。この前後から以後、中央科學院の歷史語言研究所の語法小組の〝語法講話〟をはじめとしてこの目的に沿つた工作は非常に多い。〝中國語文〟等を舞臺に言語學者の間でやりとりされた討論も從來にみられない程の數を數えた。ここにとりあげようとするのは就中、大きな論爭として一九五三年から一九五五年にわたつて、主に〝中國語文〟を中心に行われた〈汉語詞类論爭〉である。これは從來中國語法學史上常に詳細に論じられることが寡く、而も極めて重要な意味をもつ中國語の品詞論についての大きな反省の表われとして注目に値するものであると考えられる。調査によれば一九五四年五月までに、この論爭には「中國語に於ける品詞の存在如何」及「その品詞分類の指標如何」が途次「中國語に於ける形態論の解釋如何」という命題に中心點を奪われながらも、前後少なくとも三十四篇以上の論文が參加している。規模から言つても一九三八年頃から行われた前記の中國文法革新討論にも匹敵する此の論爭が、語法體系を築き上げるに最も基底的な問題——品詞の分類について根本的な理論的反省を示しつつ行われたことに、中國語の特殊性と、從來多くの語學者が樹立して來た語法體系の共通の缺陷を知ることが出來よう。この缺陷——品詞に關する理論の曖昧さは主として單音節性及び孤立性の強い中國語の本質的特性と、世界に余り類例のみられない特殊の用字法によつて、元來語法現象として說明されるべきものが、多く漢字の意義用法として說明されて來たことによると考えられる。確かに馬建忠から黎錦熙に至るまで、又その反省的な仕事としての呂叔湘から高名凱までに至る、それらの仕事のすべてに、品詞に關しては傳統的な非理論的考察や印歐語文法の形式的影響を脫しきれない多數の缺陷の存在を發見するこ

とが出來る。强いて中國語に卽した考え方を探すならば特に無定類——中國語の詞性は流動的で語には定類がないという思想が認められるがそれは長い間多かれ少なかれ中國語學者の思考を支配して來たところのものである。後記の論文で文練・胡附が指適した樣に品詞の數にしても、各著書に夫々の異論があつて少ないものは八類或いは九類、最も多くは二十三類とするものもあつたと言う有樣で、品詞に對する考え方は甚だ混亂していたと言つてよい。この混亂がこのままにしておかれてよい譯はないが、語の分類標記に關して中國語が複雜な樣相を呈しているので混亂はあまりにも長い間討論の對象になり得なかつたものであろう。こういつた事情が今次の論爭の出發點の背景である。だが論爭はなぜ起つたか。直接の動機はともかくとしてその原動力になつたものは一九五〇年六月に發表されたスターリンの〝言語學におけるマルクス主義〟が中國の言語學者や國語學者に與えた影響であると言われる。その論文は從來行われて來た中國語に對する考え方の反省を求め、如何に考えて行くかという點で多くの語學者に大きな啓示と示唆を與えたものと思われている。只何となくスターリンの言葉の故に尊重した樣な空氣が窺えるのは、如何にも今日の中國の學界が事大主義に陷つている樣で大人氣ない氣がするが、事實それ等が中國の學者たちを刺激したとすればそれは主に次の樣に說明されるであろう。卽ち由來、品詞論の輕視と非言語學的な造句法の記述に安住していた語學者達にとつては、〈建築材料は建築物とは異なるが前者と離れて後者は考えられ得ない〉〈語彙は建築材料であり文は建築物である〉というスターリンの比喩が、語法範疇の體系化を試みることなしに造句法のみに語法學の究極を求めていた誤りを衝くものとして受けとられたわけである。スターリンによれば、品詞を論ずるに足らないものとして拋つことは材料そのものの本質に洞察の眼を向けることなしに建築物そのものを直接に論議することを意味する。卽ち此處に中國語の詞性は不安定であるとして、客觀的に存在している言語活動の單位としての語に對する分析なしに、語法體系の完成はあり得ないという理由で、たとえ詞性が不安定であるとしてもその流動性の上にさえ一定の法則を發見し、體系化せねばならないという考えが萌す餘地があつたのである。詞類論爭を惹き起すための第一の原因は實に此處にあつた。

而して論爭の直接の端緒となつたものは、一九五二年〝Вапросы Языкознания (Ⅲ)〟に發表されたН・И・コンラードの〈О китайском языке〉である。次に論爭の要點を探つてみる。

二

コンラードの此の論文は同年九月、十月、十一月に〝中國語文〟誌上に彭楚南によつて華譯され分載された。コンラードの意圖は、此の論文によつて、嘗つて、諸言語の特質をとらえてその發展段階を論じたИ・Я・マルを批判することにあつたと思われるが、實際にはマスペロからカールグレンに至る、一般に支持されている一連の中國語法理論に對して反對の立場を開陳している。卽ちその第六章「形態論」で中國語に形態變化がないというマルの假定は全く根據のないものであり、中國語には印歐系言語と同樣に形態を認めなければならないことを凡そ五項目に大別出來る幾多の實例を引いて極めて實證的に論じたのである。中國語に形態を認めることは、若しそれらが肯定されるものであれば、從來極めて恣睢的になされて來た品詞分類に對して、少なくともそれらを標記とする普遍妥當性をもつた分類基準設定の可能性を見出すことになる。コンラードの論文のもつ重要な意味は確かにここにあつたと言えよう。印歐系言語に於ては形態の確認が直ちに品詞論に結びつけられる。中國語に於ける品詞論の曖昧さを取りのぞき、割然とした體系をうち出すために、このことがまず試みられるのは、事の成否は別として一應の理由はたつであろう。而もコンラード自身が示している樣に此の議論は彼によつて突然主張され出したものではない。ソ連に於ては同樣に中國語に理論的に品詞分類の可能性を認め、而してそれが中國語法體系の確實な基礎と見做している學者があることが論文中の引用に依つて判然として來る。卽ち此の論文はA・A・ドラグノフ、B・Cコロコロフ、И・M・オシャーニン、Б・K・パシュコフ等の仕事がその背景となつていることを教えてくれる。具體的には、例えばドラグノフの〝Исследования по грамматике современного китайского языка〟からは〈品詞は語法體系の中心である。それは語の組織と各種の類型的句に反映されている。品詞を離れては中國語の組織の特殊な點を理解出來ず、又その語法も說明し得ない〉という記述が引用されている。品詞の存在を認めることは、コンラードの言う樣に中國語の語法體系樹立の鍵であることには勿論異論はない。然し詳細にその論點を追つてゆくと、結局コンラードの基本的意見はカールグレンが一九四五年に刊行した〝Från Kinas Språk-

värld〟の中で述べている主張に對立するものであることが判る。（コンラードが論文中に〈カールグレンが一九四九年までは云々……〉という表現を用いているのは〝The Chinese Language——an essay on its nature and history〟として刊行された同書の英語版の出版年月を指すものでこれは〈四五年まで〉と訂正されるべきものであろう。）即ち同書の英語版六八頁～六九頁にはコンラードの指適する様に次の様な記述がある。〈中國語の文法は實際、極めて貧弱である。主要なのは文中に於ける語の關係的位置、並びに多くの文法的補助詞に對する規則である。我々の文法に於て變化とか又は活用、或いは語の組成に對する規則に纏められる全ての事柄は、完全に消滅している。語の品詞類別に對して或いは名詞の數とか格、動詞の時相とか態等を表示するために、様々の語幹や語尾の變化の如き特殊の標記を用いないという事實は、中國語を極端に簡單で貧困なものにしている。明確な、そして分析し得る方法によつて、語のより正確な意味や文中に於けるそれらの機能を發見することは我々の言語よりも遙かに困難である。我々の推測力を多大に要求するものは、この明らかな formantia の缺如であり、そしてこれが中國語の最も難解な點である。……（中國語の）主要な難解さは全く漢字にあるのではなく、中國語の孤立的性格にあるのである。〉そしてコンラードは、この様なカールグレンの見解に全く反對の立場をとりながら、實例を引いて具體的に中國語が無形態の言語——аморфный язык——でないことを論證した。恐らく此の様な實證的な試みは中國語學にとつて初めてであろう。スターリンの言語學說の影響の下にあつた中國の語學界に、此の論文が大きな動搖を與えたことは充分考えられる。詞類論爭はその發端をコンラードの論文にもつと言つてよいと思われる。

此の論文は新しい主張を多分に含むと同時に、又多くの缺點を容易に指摘出來るものであつたが、翌年の秋まで品詞論に關する二、三の論文（例えば黎錦熙など）があつたが、明らさまにコンラードの說に對して批判を加えたものは見當らない。眞正面からそれに反駁を加えたのは〝中國語文〟一九五三年十月號に高名凱によつて發表された〈关于汉語詞类分别〉である。高名凱は冒頭にまずスターリン學說によつてマルを批判したガルキナ・フェドルク（香坂順一氏はカルキナ・ペトロックからの引用だと言つているが、引用された論文によつてこれはその後も〈Институт Языкознания〉などに、メシャニノフを批判する論文を書いている Галкина Федорук であることは明らかである）の言葉を引用する。即ちフェドルクの〈名詞、動詞、形容詞は思惟抽象化の結果であつて、如何なる言語も全て

品詞をもつものではなく、或る種の言語が如何なる時代にも品詞類別をもつわけではない。――乃ち語の上に固定した形狀があらわれた時にはじめて語自體に品詞の別を認め得る。若し幾つかの言語が品詞類別をもつていたとしても、各々の言語間に同樣な分類があるとは限らぬ。〉という言葉に基づいて、中國語に於ける形態を否定する議論を展開し、且逐條的にコンラードの試論を批判している。

引用されたガルキナ・フエドルクの理論は；事物概念によつて品詞の概念を得ることは思惟の抽象化工作――абстрагирующая работа――の結果であつてそれをそのまま語に適用することは出來ない。語の分類は語にあらわれた外形に據るものである：というように解釋されるが、それによつて考えれば〈人々が名詞だとしている「山」「水」「魚」「人」は名詞であることを示す特殊の語音形式をもつていない。それらの内包する意義は、その語が現實の山、水、魚、人を示すのみで、それが名詞だということを說明するものではない。これらを名詞だと認めることは、山や水等の意義の上に更に一個の名詞という意義を加えることである。〉大體に於てこれが高名凱の主張の基底をなすものであると考えられる。

そもそもコンラードは前揭論文に於て、中國語に樣々な形態を發見し得ることを實例を以て指適した後で、それらに依つて中國語に對する無形態論がその成立の根據を失うことを述べ、語は全て若干の類型に分けられ、各類型は組織上の共通な形態論的特徵卽ち形態範疇をもつが故に、中國語が一定の品詞に分類されることを證明したのであつた。そこで結論として具體的な品詞分類の標記が問題となつて來るのであるが、コンラードは〈此の標記中、最も重要なものは附加法（аффиксация）であり、第二に重音であり、第三に聲調の變化による場合であり、第四にそれらのどの標記をもたない場合は本來の語法形式より說明され得るし、第五に句法標記も重要なものである〉と述べている。但しコンラードは勿論此等一切の品詞の類別方法は語の意義的性質と無關係ではないという條件をつけるのを忘れてはいないが、これは後で觸れる樣に注意されるべきことである。高名凱はこれらの提出された形態範疇に問題ありとして次の樣な批判を加えた。卽ち；

まず附加法について。コンラードは――中國語に於ては語根に或る種の語頭語尾を加えて多種多樣の語が出來ているとして〈無數地無條件地、不干涉　不平等、總領事　總罢工、第一　第五、反攻　反革命　反人民的、親法西斯的、刀子　小孩子、木頭　石頭、桃兒

時候兒、作家、無産家、外交家〉等をあげ、而も此の場合重音が語根にあることが法則として認められるから、これらの語が一定の形態上の組織をもつている——と言う。これに對して高名凱は——兒、子、頭は中國語に於ける或る程度の形態變化として認め得る例かも知れないが、例えば白麵に語尾としての兒を附加したものはもとの語と意義は異なつているが、それによつて品詞が變化するという譯ではない。語法範疇の變更を來たさない形態は形態論上の形態とは言えない——と反駁した。

次に高名凱が指摘しているのは、コンラードが彼の用語に從えば лексикализация の例としてあげたものと、〈單音節詞が文中に於て全く特殊にして明確な形式をとり、而も整體的一致性が重音によつて確證される〉例としてあげたもののうち、一種の形態素と考えられた補助詞についてである。コンラードは——所謂、一種の〈造語形式による語彙化〉の例として、

(A) 動詞の可能語態による分析形式
- 肯定式　笑→可笑→可笑的
- 羨慕→可羨慕→可羨慕的
- 否定式　克服→不可克服→不可克服的
- 避免→不可避免→不可避免的

動詞の被動語態形式
- 綜合的　拘留→被拘留→被拘留的
- 分析的　壓制→受壓制→受壓制的

(B) 〈要、或、便、只、有、於、和、若、肩〉の如く名詞、動詞、連詞、介詞たり得る、一見何の形式ももつていない様な場合が次の様になるとき

名詞の場合

(綜合的)　橋→橋的　(мост→моста にあたるとしている。)

(分析的)　臂→用臂　(кисть→кистью)

動詞の場合

（綜合的）　來→來了　（приходить→пришел）

（分析的）　來→要來　（приходить→лриду）

これ等に於て示された補助詞について、高名凱は〈それらは語根と分離し得るものである。元來品詞を決定する語法形式は語根と不可分離的でなければならないから、斯くの如きは形態論の理論から言つて形態素とは認め難い〉と斷定した。而して印歐系言語、例えばサンスクリットやラテン語ではそもそも語根のみの獨立存在を發見することは不可能であることから、考察を進めて、チコバーヴアの〈中國語には既に品詞を決定する形態變化がない〉という意見に全く同意であり、從つて、〈們、着、的〉は形態ではなく單なる補助詞であると述べている。又、聲調の變化を品詞分類の標記と認めることは强ちコンラードのみでなく、カールグレンにも窺われる考え方であるが、高名凱によれば、それは根元を同じくする語から發展して異なつた意味を表わすもので語法上の變化を意味していないと言う。例えばコンラードの擧げている例については、全く意義を認めていない。卽ちそれぞれ上聲と去聲の〝好〟が前者が形容詞で後者が動詞であり、これを所謂內部屈折の現象としたことは異義の變遷を考慮に入れていないから誤りであるとするのである。

語法形式について。コンラードは一つの語が文中に於て何れか一種の補助詞を要求する時、それによつてこの語の品詞が決定され得るとしたが、高名凱はコンラードによつて最後に擧げられた語法標記と共に、これによつて品詞を決定することに反對する。補助詞如何及び語序によつて語を分類するのは、品詞の決定が形態のみに憑るという原則に背反するもので、それらは單に語が文中で負うている機能そのものを示唆するのみで品詞を語るものではないというのが高名凱の見解である。

高名凱の反駁の重點は大凡右の如きものであつたが、但しコンラードが中國語に於ける特殊にして且つ普遍的な形態として取りあげた若干の點については、直接的若しくは具體的な批評を行つていないことに留意しなければならない。卽ちコンラードは以下に見られる樣な二個の意義ある形態單位が結合する双音節詞は現代中國語の重要な地位を占めるものであり、その結合を分析すると種々の場合

が出て來るにも拘らずそこに一定の法則を認め得るとした。〈太陽、電話、道路、辛苦、看見、寫字、看書〉等に於て修飾語が被修飾語に先行している場合と、同意義の語の結合は重音が第一音節に、動詞に補語が附加している時は第二音節にという樣に、中國語の一面に存在する完全に固定化した形態組織が此處に見られるとするのである。コンラードに依ればE・H・ポリバノフはこれらを初級合體詞と名づけ、又オシャーニンは綜合詞或いは双音節詞と稱しているという。そして彼自身の用語に從えば、これは〈造語方法に基づく形式の複合詞〉と呼ばれるべきだと言う。高名凱は聲調の變化について、それが語法範疇の變更を意味しないことを指適したに止まるが、コンラードが双音節詞一般に存在する重音の法則に就いて、それが品詞分類の標記となることを示したのは略々肯定さるべきものの樣にも思われるにも拘らず、高名凱がこれについて觸言していないのは蓋し前述の樣に外的な形式に表われた語尾變化、屈折のみが形態であるという思想に完全に支配されていて、その他の標記については全てを形態と見做さない以上、此の場合觸れる必要なしと認めたからであろう。

然し以上で大體判る樣に、高名凱はコンラードの考え方に完全に對立する意見をのべて、品詞分類が屈折變化のみに依存すべきである點を强調した。結論として、高名凱は若し中國語に品詞分類を試みようとすれば、實詞と虛詞卽ち補助詞の區別があるのみだと主張する。彼の言を借りるならば〈若しも實詞の前後におかれた言語の成分——補助詞——を形態であると規定すれば、一切の語法成分は全て形態であつて孤立語、膠着語、屈折語の別をたてる必要はない。その故に中國語の語が品詞の類別を持たないと主張するのであつて、實詞と虛詞の區別をもたないと言うのではない。ただ中國語の實詞が名詞、動詞、副詞の區別をもたないと言うのみ〉なのである。そして高名凱は一般に中國語に品詞ありとする意見を批判してそれが大體左の樣な理由に基づくものであるとする。

(1)無品詞を言語の特性とすることは、マルの意見の樣に、その言語が低次元の發展段階に止まるものだという考えに結びつく。言語の形態的分類は一九世紀初頭、F・シュレーゲルの唱導にその端緒を開くものであるが、それによつて言語の發達次元を云々することは誤りであり、マルはまさしくこの誤ちを犯したに過ぎないが、シュレーゲルの分類は言語の特殊面の所在を示すのみで發展段階を示すものではない。チコバーヴアの〈現代中國語に附加成分がないと言うならば、それは長期にわたる發展の結果であつて決してその發

端に止まることを示すものではない〉という言葉は是とされるべきである。即ち無品詞、これが中國語の特性である。(2)意義からの解釋と文法的解釋とを混同しているためである。(3)既に述べた樣に虛詞を形態素と誤信しているからである。(4)聲調の變化を品詞の相違と考えるからである。以上によつて中國語の分析は品詞から出發してはならない。

此の結論はコンラードの論文の形態論の結語としてやはり簡條的に示された六項目の中の少なくとも四項目、即ち：(2)此の論文で述べられたこの種の語彙は形態學上形成された語によつて成立する。而も語そのものを形成する方法は多樣である。(3)中國語の語彙は若干の種類に分かれて居り、一言語が要求する一切の概念を含む此等の品詞は夫々特殊の構造をもつ。(4)語は言語活動の中で結合されてその語法形式を表現するが、此の種の語法形式はその特徵上且意義上豐富にして多樣である。(5)中國語の文法構造はそれ自らの正確な法則を有する。文中の語は語の組織の何等かの關係と共に全て幾つかの法則に從つて表現される：等に完全に背反するものである。

此の高名凱の論文は一擧に品詞論に對する關心を高め、論爭を活潑化することになつたが、引き續き發表されたいくつかの論文はコンラードの意見を全面的に受け入れないまでもその多くは概ね高名凱批判に傾いた。然し此處で言つておかなければならないことは、中國語に對する形態論をコンラードが殆んど印歐語の屈折形態の概念に結びつけようとした方法に對する高名凱の批判は　此の論爭を性格づける大きな力となると同時に大きな意義をもつものであつて、以後の論文の高名凱批判に妥當と思われる點が多いからと言つて、一概に高名凱の觀點を無意味なものとして斥ける譯にはいかない。少なくとも論爭に占めた高名凱の論文の意味は大きいとしなければならない。

三

高名凱批判を目標に或いは高名凱の形態論に反對の立場をもつて〝中國語文〟に發表された二十數篇の論文のうち曹伯韓、文練、胡附、顏景常、B・F・ムトロフ、林燾、陳乃凡、呂叔湘などによるものは割合に重要な意味をもつていると思われる。このうち文練、胡

附というのは二人の共同作業であり、同樣に共同執筆のものとしては、前記の外に鐘棧、趙淑華、金德厚、王还の四人のものもあげることが出來る。〃中國語文〃に發表されたB・T・ムトロフ（實藤惠秀氏はモトロフ、又はモロトフとし香坂順一氏はムドロフとしているが、正確な氏名は不祥である。論文に冠された氏名は穆德洛夫となつているのでここでは一應ムトロフと呼んでおく）の論文は勿論中國語であるが、或いはもとロシヤ語で草されたものかも知れない。これも不祥である。呂叔湘の〈关于汉語詞类的一些原則性問題〉をこに一括して並べるには多少の疑問がある。單に高名凱の學說に反對というのではなく更に、大局的な高い次元から論爭全體を批評し、論爭に中間的總括を與える性質のものだからである。此處では高名凱批判の線が極めてはつきりと出されている文練、胡附の〈談詞类的分类〉とムトロフの〈汉語是有詞类的分別的〉を探つてみたい。スターリン學說に基本線をおく曹伯韓の〈关于詞的形態和詞类的意見〉では〈中國語の特殊性を强調するために、中國語には語に形態變化なし〉とするのは誤りで〈廣義の形態も狹義の形態もともにあり〉特に〈廣義の形態が甚だ重要である〉とされているが、文練、胡附は高名凱の主張に含まれるものが屈折語のみに適用される狹義の形態論であつて、中國語を分析するためには廣義の形態論こそ採らねばならないとする。卽ちどの樣な現象を形態とするかと言う點で高名凱に對して形態解釋の異論を提出したものである。勿論彼等は中國語には客觀的に品詞の存在を認め得るという立場に立つている。辛じて高名凱と同一の見解を示すものは例えば〈光榮的中國〉と〈中國人民的光榮〉に於ける〈光榮〉の比較で意義から語の機能を論ずることが無意味であるという點に盡きる。このことに關しては後で述べる樣に、分類が如何なる標記に基づくとしても語の意義を全く無視することに大きな疑問があるが、此處では一應それを省いて論文の要點について述べてみる。文練、胡附は〈品詞は語法體系の中心でありそれは亦語の組成と各種の句型に影響を及ぼす。品詞を用いずに中國語の組織の特質を理解することは不可能である〉というドラグノフの言葉を承けて中國語の分析には品詞體系の樹立が必要にして缺くべからざる前提であることを認め、品詞類別に關しては語相互の關係及び語の結合關係を形態として、これに基づいて區分を行わねばならないとする。謂わば〈語は一定の形態標記に從つてその屬する類を表わすものである〉というコンラードの說を支持し且、高名凱が嚴密にして狹隘なる屈折形態論上より定義して形態と認めなかつたものを再び形態と見ようとするのである。此の論文に於ては形態とは何であるかという點について、語の屈折變化及び接頭、

接尾辭を指す狹い領域の解釋の外に、語の相互關係、結合關係を含む廣義の解釋を採用している。前者の解釋に從えば形態は乃ち〈子、兒〉等であり高名凱はこれ等がついても品詞は變らないと言つたが實際には語法範疇がこれによつて變り得るものであることは〈活／活兒　胖／胖子　瘦／瘦子　瘋／瘋子　呆／呆子　辣／辣子〉等を觀察することによつて、たとえそれらが例外のない完全な標記となり得ないまでも明らかである――というのが二人の主張である。そこで最初の解釋に從う形態の存在がまず肯定され、更に後の解釋――嘗て方光壽が中國文法革新討論中に示した形態の廣義の解釋が展開される。その立場で文練・胡附が列擧した品詞分類の標記として考えられる形態を、論文中の具體的な實例に卽して次に列記してみる。

(1)形態と認められる語の相互關係

〈一個、兩塊、三支、四本、五杯〉等、〈這個、那塊、那支、那杯、那種、一次〉等に續く語は同一の範疇に入れ得る。假にこれを名詞だとすると此等に續いて現われた語は名詞であるという法則が成り立つ。

(2)〈不、會、能、敢、該〉等に先行され、重疊が可能で、且〈了、著、起來、下去、過去、過來〉に續かれ得るものは動詞と規定する。從つて此の鑑定に役立てられる〈能、會、該〉等自體は動詞ではない。理由はそれ等自體にこの方法を試みることによつて明らかである。

(3)〈十分、非常、很〉に續き〈極了、得很〉に續かれ同一の單音が再度繰り返されたあと〈兒的〉のつくことの出來るもの。而して重疊される場合に、前項と異なる方法、卽ちそれが双音節の場合は單音節ごとに分離されて重疊されるものは形容詞と認定されてよい。

右の樣な試論を提出することによつて文練、胡附は高名凱が形態でないと主張している部分を再度形態だと認めさせようとした。その方法はコンラードがロシヤ語法の附會だと思わせられる樣な理論を表面に出していたのに對して、飽くまで中國語獨特の形態を發見し、それらを標記として品詞分類の可能性が見出されることを主張する意圖をもつているように思われる。從つて中國語の品詞は廣義の形態と見做されるものに憑つて分類することが出來ると言うのが二人の結論である。この論文に擧げられた具體的な例はそれが形態であるか否かを別として分類標記としては概ね妥當なものと思われる。ただ此の論文によつて論爭ははつきりと本筋からはずれはじめたと

言えるようである。或いはそれは論爭を性格づける意味をもつて登場して來たと考えられてもよい。と言うのは次にとりあげるB・T・ムトロフの論文で更に明らかになるが、元來論者は全て品詞體系設定の可能性があるかないかを論ずる企みをもつていたにも拘らず、形態によつてのみ品詞は分類されると言う前提に據つたために、論爭の進行につれて、議論の焦點が、形態があるかないか——何を形態と呼ぶかという問題に絞られて來ていることである。この點に關しての論評は更にムトロフの論文を分析してから全般的に高名凱對文練、胡附、高名凱對コンラード——ムトロフの對立意見を一應はつきり見定めて夫々の論文をもう一度吟味しておいてからの方がよいだろう。

一九五四年六月、ムトロフが同じく高名凱批判の姿勢で前述のような論文をもつて此の論爭に參加した。その論點を纏めると、

(1)品詞は意義から分けられるべきではない。

(2)聲調の變化は品詞を變更するものではない。

(3)高名凱は語形變化のみを形態と認める屈折形態論の立場をとつているが、それは誤りであり、引用されたガルキナ・フエドルクの學說についてもフエドルクがすでに文練、胡附の主張する廣義の形態論を認めているから、その引用は完全にして充分なものではない。又屢々このことに關してチコバーヴァが引用されているが、中國語に關してチコバーヴァが何等の定見をもたず、高名凱の引用にかかる個所はフインクの學說の單なる重踏であり、而してそれは既に多くの人の批判によつて價値を保有していない。この理由によつて引用について高名凱は無責任の嚱りを免れ難い。

(4)實詞と虛詞については、高名凱の意見そのものに矛盾を認め得る。即ち既に虛詞が虛詞であることを確かめられるのは、それが他の語との結合關係によつて示されるものに基づくものである。形態を論ずるに際しては屈折變化のみでなく、語間の結合關係、語に內在する機能も含めるべきである。

(5)高名凱が〈山、水、魚〉等に名詞となるべき形式がないと述べているのは、漢字の特性に無意識的な影響を受けて居るからである。〈子、兒〉は少なくとも名詞の標記と考えられる語尾の一種であるし又〈山、水〉は〈這个〉に連接するが〈不〉には續かず、逆に〈走、想〉は〈不〉には連接するが〈這个〉には連接しない。これは即ち語法上の區別と言い得るものでつまり品詞の差を示すものである。

〈子、了、着〉が語根と不可分離的でないという理由で形態素と認めないのは〈這張桌〉〈他已經來〉と書かれた時に〈這張桌子〉〈他已經來了〉と理解され得ることが同様に象形文字の力によるものだということを考慮に入れないからである。

ムトロフの論旨は大體に於て右の如くであるが、一見して解る通り、このうち高名凱と意見の一致をみているのは最初の二項のみで、結局コンラードの意見を幾分修正しつつ中國語に於ける形態論の解釋は、ヴアンドリエースが"Le Language"で示している線まで擴張して考えるべきで、屈折形態論の概念のみによつて中國語の形態を否定的に論ずべきではないという立場に立つている。

此れに對して高名凱は再び同年八月に〈再論汉語的詞类分别〉を發表したが、その論旨は前の論文と殆ど變つていない。ムトロフが語と語の結合關係、語の文中に於ける機能に品詞分類の基準をおいたことに反對し、語の形式即ち語の屈折形態以外に標記はあり得ないとしている。乃ち前に述べられた、語の文中に於ける機能を形態と認め難いとする觀點は決して修正されることなく、飽く迄〈語法範疇は語の變化表のみにあらわれる〉とする立場を譲らないが、此の論文では特に議論がクヅニツオフの〈語の變化は語法範疇によつてあらわされなければならない。形態とは單獨に語の特徴のみを意味する〉という言葉によつて進められていると思われる。此の立場から再び語の機能は形態ではなく、語の結合關係も形態とは認められない以上、中國語には形態そのものが存在しないことが明らかであるという。而してスターリンの〈文法は語の變化規則及び文を作る規則の綜合されたものである〉という言葉によつて語形變化と構文法則とは別項の事柄に屬するという結論を導く。彼の言葉を借りると〈鐵が木柱の代用になつても鐵は依然鐵であつて木ではない。乃ち名詞以外のものが名詞として使われてもそれは名詞ではない〉とする。〈我走〉と〈走不是辦法〉の二文に於て〈走〉が意義上動詞或いは名詞と解釋されるのは論理の問題であつて形態の問題ではない。〈個別的な語の變化を用うることなしに任意の關係を表わすとき、その關係を表わすために用いられるものは補助詞である〉というクヅニツオフの言葉によれば〈着、的〉は補助詞であつて形態ではない。反對者は文法範疇と意味範疇とを混同しているのだ。——とムトロフを反駁した。此の論文に於ては彼が嘗つて自著〈汉語語法論〉で〈文中の語の位置によつて品詞が決定される〉とするカールグレンに接近した考え方が完全に否定されていることに注意しなければならない。

四

以上の外、種々の論文を縱覽して明らかになることは、前に述べたように論爭の重點が文練・胡附の論文あたりから形態の概念規定に集中して來ていることである。それより以前に發表された陸宗達の〈汉語的詞的分类〉や王力の〈汉語的詞类〉等は、一應品詞分類の可能性を肯定的に論じながらも、形態そのものの定義には詳細に觸れていない。又賀重の〈詞的分类有哪些不同〉は從來行われていたいくつかの品詞論を比較してその差を論述し、結局語よりも句中心主義の分析方法を執つて、品詞論に重要な意味を與えていない。然し文練・胡附が高名凱の形態を認めない考え方に反對して、その否定の對象となつているのが〝狹義の形態論〟であつて、中國語に對しては所謂〝廣義の形態論〟が適用されるべきであると論じてから後に現われる論文は、概ね此の線に沿つた考え方を示している。勿論、文練・胡附が〈談詞的分类〉を發表する以前にも所謂〝廣義の形態論〟に立つ論文もいくつか見える。兪敏は〈北京話的實體詞的詞类〉に於て語の重複や或いは重疊に伴うr化及び輕聲化にそれぞれ差異を求め、これに依つて品詞の決定を試みようとしているし、曹伯韓の〈关于詞的形态和詞类的意見〉〈對汉語語法研究的几點意見〉はコンラードの理論を採用して語の結合關係に對する考察が語法研究上の基礎的な課題たることを說明して文練・胡附の理論の先驅をなすものである。更に周祖謨の〈划分詞类的標準〉も勿論この系列に屬するものであろう。然し〈談詞的分类〉以後の論文は大體文練・胡附の線に沿つて、はつきりと高名凱の論點を否定する立場で〝廣義の形態〟を認めようとしていると言うことが出來る。例えば顏景常；〈對於語法討論的意見的希望〉（〝中國語文〟《以下略す》五四年三月）、林燾；〈汉語基本詞彙中的几个問題〉（五四年七月）、陳乃凡；〈汉語里沒有詞类分別嗎？〉（五四年八月）等の外、胡附・文練の〈詞的範圍・形态・功能〉（五四年八月）と鍾棂、趙淑華、金德厚、王還の〈汉語的詞类問題〉（五四年八月）などは明らかにこの新しい形態の規定に於て品詞を論じているのである。この趨勢を決定的にしたのは前記のムトロフの論文であるが、無品詞論をとつた高名凱と數多くの反對者との間に介在するものは要するに形態の概念規定の乖離であると考えられる。同一のものを一方では形態ではな

いと考え、他方がこれを形態と認めるならば、共に形態が品詞分類の唯一の條件であるという同一前提をもつ以上、結論が對立してくるのは當然である。そして實際には語の機能、結合、連接關係、補助詞等が形態であるか否かが主に論爭の焦點になつているようである。然し、兩者が一般的に形態論的處置のみによつて品詞を考えてゆくところにも問題がないであろうか。鍾梭外三人合作の〈汉語的詞類問題〉にもこのことに關して部分的に疑問を提出している個所があるが、語法範疇の分折に際して、如何なる言語が對象になるときも形態論的方法が常に大きな比重でとりあげられようとすることには、些かの疑問なしとしない。統辭論と形態論の間に介在する一線は極めて不安定なものであつて、元來それは存在しないと考えられる。卽ち扱われる言語により、兩者の領域に常に變動があると考えることは決して誤りではない。

前に述べた樣に、多くの論文の中で孤立した位置をとつた高名凱の意見に、私はいくばくかの存在價値を認めた。そしてそれは專らコンラードの問題提起に關係がある。コンラードの見解は後にムトロフ等が展開した形態の定義と異なるもの、例えばその論文中の〈中國語には、印歐語と同樣に形態を認め得る〉という言葉が示すように、少なくとも印歐語一般に分析される概念、というよりもロシヤ語の世界に考えられる概念を可能な範圍で中國語に適用しようとしたものである。語尾屈折の豐富な言語の研究指標と考えられる形態論をそのまま中國語に考えようというのは、嘗つて〝馬氏文通〟以來〝國語文法〟に至る間に試みられたラテン語乃至英語の語法範疇を、中國語の分析に利用したことより以上に愚かでないとは言い得ないだろう。最初に中國語に對して行い得る形態論の檢討を省いたコンラードの誤りはここにある。高名凱が形態の概念規定を嚴密に論じて、その結果に立つかぎり中國語に形態變化を認め得ないとしたのは、その故に大きな意味をもつものと考えられる。例えば高名凱がその最初の論文中に於て、聲調轉化が形態で、それが又品詞分類の標記たり得ることを否定したことは、このことの具體的なあらわれである。高名凱は、上聲と去聲の「好」を考察して二者が品詞と共に意義を異にするものであれば、聲調の變化によつて英語の to develop と development とに見られるような品詞分類の標記を求めることは不可能だと述べた。これは確かに間違のない見解であると思われる。ただ比較に出された英語はあまり適當なものとは考えられないが、import と impórt のようなケースを考えれば、この限りに於ては彼の意見が尊重されるべきだと思わざるを得ない。卽ち

／厂∨幺／と／厂＼幺／は適々同一の漢字によつて示されるが、もともと別個の語であると考えるのは容易である。その部分的に試みられた形態論が既成概念にとらわれた觀念的なもので、實際に語の分類にあたつては、それが役に立つ領域の余りの狹さに、コンラード自身が恐らく驚かなくてはなるまい。例えば動詞の過去時相が綜合形式によつて示される例としての、〈打下基礎——打下了基礎、取得穩定——取得了穩定〉等は考察の不足を如實に示すものであろう。又名詞に格變化を規定しようとして〈他——給他〉が〈он——ему〉に〈刀子——用刀子〉が〈нож——ножом〉に對應されたり、或いは再び動詞の時相に關して〈賠錢——要賠錢〉が〈потерпеть убыток——потерпит убыток〉と同一に論じられるのは決して妥當であるとは考えられない。全てをここに引けないが、コンラードの論文を讀み、且高名凱の意見を閲みしたものは、恐らくその駁論にいくばくかの妥當性を認めざるを得まい。だが從來の規範的な模倣語法論によつては、中國語の本質に觸れ得ないことを知つて、その理論の次元の低さと狹隘さから脱け出ようとする試みが今まで多數の學者によつて試みられて來たことや、特にスターリン言語學說の影響を考慮にいれれば、コンラードの論點にある意味での價値が見出だされるであろう。即ちコンラードが中國語に形態論の適用が可能であるとして、少なくとも實證的にこれを論じたことは中國語研究に新しい飛躍の礎を作つたと言うことが出來る。然しながら學問的分析の深さと、洞察の正確さについてこの論文が賞讃され得ないことは悲しむべきことである。形態論を孤立的性格の殊に強い中國語に對して、その方法を吟味することなしに直接的應用を試みたことは極めて疑問とされるに足る點である。この意味で高名凱がはつきりと屈折形態論の適用を拒んだことは論爭の一つのピークとなるものである。だがそれは又、論爭が品詞論そのものからずれて形態についての論議が問題の全てであるように論じられてゆく端緒にもなつている。それは主に高名凱が形態の否定から直ちに無品詞論をうち出したことに起因すると考えられる。問題は語の結合關係、補助詞その他、反對者達によつて形態と解釋されたものが、言われるように形態でないとしても、語を類別する條件になるという點に高名凱が留意しなかつたことにある。勿論それは、形態のみが品詞を決定するという前提をもつからなのであるが、高名凱はその前提を檢討する必要があつたのである。

文練・胡附その他の論者も又同樣の前提をもつ。提示されたものは確かに品詞の分類標記となりうるものではある。ただそれをどの

ような手續きで行うかということが大きな問題であることを認めなければならないのだが、これに觸言しているものはあまり見當らない。然し一般に形態範疇のみが品詞分類の標記になるという前提にたつ以上、これらのものを形態と認めざるを得なかつたのは當然であると理解される。形態という概念が何を意味するか、高名凱と文練・胡附の間に大きな差があるのはともかく、中國語の場合、一部分の――特定の語の要素の考察以外にはそれは余り關與するとは思われない。勿論、曹伯韓が〈汉語的詞的分類〉の中で〈語は客觀的事物及びこれらの關係を反映する〉〈反映された對象は分類が可能である〉から品詞の分類が可能であると結論づけようとする方法は全面的に卻けられるべきである。

そこで〝廣義の形態學〟に依存する人々の提出した形態を整理してみると次のような點が共通項目として擧げられよう。卽ち(1)語法作用に使用されるもの――虛詞・補助詞(2)實詞の機能(3)語の連接關係(4)語の要素。これらは確實に分類標記の一部を形成するものと考えられる。そしてこのうち最後のものは少なくとも中國語に認められる唯一の形態素であるという考察は妥當であろう。然しこれも、〈形態は言語要素の一が他のそれと關係する時にとる音相である〉という考え方からすれば形態と認めることは困難である。ただこれのみをもつて律すれば、高名凱の〈語尾屈折のみが形態である〉と選ぶところはないのであるが、少なくとも中國語に於て語の構成要素に形態を考えることは出來そうである。例えば〈看頭、莊頭、苦頭、想頭、香頭、吃頭、用頭〉等の頭は人間の行爲を抽象化していることは事實であつて、單音節詞の〈頭〉とは無關係であることを見なければならない。このようなものを總じて形態素と規定することは出來るだろう。ただこれが普遍性に惠れないこと、多數の例外が認められることに注意しなくてはならないが、然し恐らく中國語に於てはこのようなもののみが形態として扱われるべきであろう。(1)から(3)までのものは元來統辭論的處置に無關係ではあり得ないからである。前に引用したように、カールグレンは〈(中國語の文法の)主要なものは文中に於ける語の關係的位置並びに多くの文法的補助詞に對する規則である〉と言つているが、〈(その故に)中國語の文法は極めて貧困である〉とする點に些か問題があるとしても、中國語は常に文を離れては考えられないという意味はもう一度考えられなくてはならない。〝馬氏文通〟にも部分的に同樣のことが語られているのも、素朴な理論だが或る意味では甚だ示唆的である。

即ち使い古された單音節、孤立語という術語が中國語を呼ぶに全く應わしいとは、今日多くの人は恐らく考えないだろうが、中國語がその典型ではないにせよ、比較的その性格が強いということは猶斷言することが出來る。事實、E・ブイサンスが指摘しているように、中國語には變化語は存在せず、語は全て不變化語と派生語及び合成語の何れかに屬しているのである。一般に不變化語の占めている領域が廣ければ廣いだけ、形態論の適用範圍はどうしても減ってゆかねばならない。そしてその文法分析には他の言語で形態論の占めていた領域に、統辭論が代って用いられてゆくべきだと考えられる。前にも述べたように、形態論と統辭論の間にもともとギャップなどは存在しないのであって、古代ギリシヤ語やサンスクリットでは、後者よりも前者が殊に偏愛されるが、典型的な屈折性言語の性格が薄くなるに隨って、後者の功用は當然大きくなってくる。中國語に於ける形態素の存在を否定しようとは思わないが、〝廣義の形態〟として求められたものの多くが、統合論、及び統辭論的に考えられてゆくべきで、それらを形態論的方法に一括しようという試論には賛成出來ない。つまり品詞の決定に際してどうしても形態論的據點をもたなければならないという前提は肯定されないし、その意味で論爭を通じて〝廣義の形態〟としてとりあげられたものは何等語の分類標記の資格を失うものではないが、それらを取り扱ってゆく方法はあくまで統合論、及び統辭論的方法を中心として行われるべきであると考える。

〝廣義の形態論〟と稱せられる立場にたつ人が、示された語の分類標記を形態論で取り扱うべきであるとするのは、既に何度も言うように、形態の發見のみが語の分類に通ずるという前提條件を滿足させるためであるが、それは恐らく形態というものを〈言語表現の上で多數のものに通ずるような全ての潜在的機能の形である〉と考えるからであろう。然し、F・ソシュールが共時言語理論に於て語の結合關係を語法研究の基本的課題であると見做し、これを統合論・聯合論と名づけたのは、元來形態論と統辭論とを判然と區別する方法を卻けたからであったと考える。その意味で形態論的な考え方でこれらの標記を處理してゆくことには賛成できない。中國語の場合、どちらかと言えばそれは統辭論方法を優位に考慮すべきである。馬建忠、王力、高名凱、語法小組の思想にあらわれた「次」、や「向心結構」、「謂語形式」、「關係論」、「四結構說」等はこの樣な意味で顧られる必要があろう。

〝廣義の形態〟と言われている標記がそれのみで語の分類を完全に行い得るものとは思われない。コンラードはこの點について、先に

注意しておいた様に、分類に際して語の意義も決して無視出來ないという條件を加えており、文練・胡附以下の論文にも意義が間接的な分類の極め手であるとしているものがある。このことについて、呂叔湘は〈关于汉語詞類的一些原則性問題〉の中で、各種の形態的標記を用いても、標記に對して㊉㊀を決定するには結局意義の成立如何を無視出來ないと說明している。例えば〈他的錢〉に對して〈他錢〉が成立しないとしたり、或いは〈狗叫〉と〈狗的叫〉が同一の格式に屬さないとか、又前者が句で後者が然らざる等のことを理解するには意義の考慮に據る以外はないとするのである。結局意義を離れては分類は不可能で言語は形式と意義との結合であるが故に、意義を考えずに形式は說明し得ないという。然しながら、思うにこれは統辭論の問題である。右のような意味で意義を考慮に入れるということは、文に於てそれが要素として成立するかしないかの問題である。換言すれば、所謂〝廣義の形態論〟とは統合論であり、その多くが統辭論的觀點に於て考えるときにはじめて標記としての功用を果すわけである。

又、呂叔湘は前揭の論文中でそれまでにとりあげられた分類標記を五項目に整理したが、これらが如何にして、如何なる配合手順によつて適用されるかを問題にしている。即ち任意の語がAの標記ではA′に、BによればB′に分類される場合を假定するならば、その二個の範疇が重復する領域をどのように解決するか。そういつたケースを看過することは、中國語の品詞論が再び一詞多類說、詞類通假說、甚だしくは無定類說に逆戻りする可能性が出て來る。そのように形態範疇としてとりあげられた種々の標記を實際の分類に適用するに際しては、標記の運用に關しても數多くの問題が出て來るであろう。又前に言つたように、擧げられた標記で全ての語が果して分類出來るかということが、これに附隨して重要な反省となるであろう。そこでこれらの分類標記の適用には綜合的に統辭論的な考え方が要求されなければならないし、これらの標記の及ばない領域には統辭論的判斷そのものが用いられなければならないという結論が導かれるのである。